



Title	発掘調査成果からみる太田城と太田城水攻めの実態
Author(s)	大木, 要
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 763-774
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105087
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

発掘調査成果からみる太田城と太田城水攻めの実態

大 木 要

はじめに

天正13年（1585）、羽柴秀吉による紀州攻めの最終段階でおこなわれたのが太田城水攻めである。太田城には根来衆や雑賀衆の残党が籠もっており、太田城を攻略するために同年3月28日以降、城の周囲に全長5 km以上の長大な堤防を短期間で築き、紀の川の水を堤防内に引き込んで水没させた。水攻め後、同年4月22日には和睦となり、一揆方の首謀者とされる50名ほどが処刑され、太田城は放火・開城される。その直後、秀吉の弟である秀長により和歌山城の築城が進められ、紀州は近世社会へと移行する。

太田城については、平安時代末頃に形成された環濠集落が発展したものという位置づけが太田・黒田遺跡の初期調査の段階でおこなわれており（森・白石 1969）、北野隆亮氏がその後の発掘調査成果も踏まえ、太田城が東西約450 m、南北約350 mの環濠集落であり、集落内部は東西および南北に道路が貫通する中世都市的な景観を復元している（北野 2008）。太田城水攻めに関しては、古くは田中敬忠氏により実地調査が進められ、三尾功氏により短期間に大規模な堤を築いて水攻めをおこなった様子や築かれた水攻め堤の規模や範囲などが明らかにされた（三尾 1985）。

太田城跡ではこれまで数多くの発掘調査が実施されており、太田城の外郭構造や内部の遺構・遺物の分布状況など太田城に関する情報が蓄積されている（大木 2019）。また、水攻め堤についても堤本体の調査をはじめ、堤の推定ライン上に位置する遺跡で水攻め堤に関連する遺構がみついている（大木・菊井 2016）。本稿では、発掘調査成果をもとに太田城と水攻めの実態について考えてみたい。

1. 太田城の成立について

（1）太田城の前身集落の成立について

中世の土地利用を把握するために、太田・黒田遺跡における居住域に関連する遺構と作土が確認された調査地点をおさえ、その範囲を示したのが図2である。生産域については遺跡外にも展開している可能性は高いものの、調査で把握できた範囲を示している。

図1 地籍図から復元された堤の範囲と調査地点

鎌倉時代には微高地上に2単位の居住域が形成される。北側居住域と南側居住域との間には微地形の影響から空閑地が存在している。生産域は居住域を取り巻くように展開している。室町時代～安土桃山時代になると、鎌倉時代に居住域であった微高地の北側

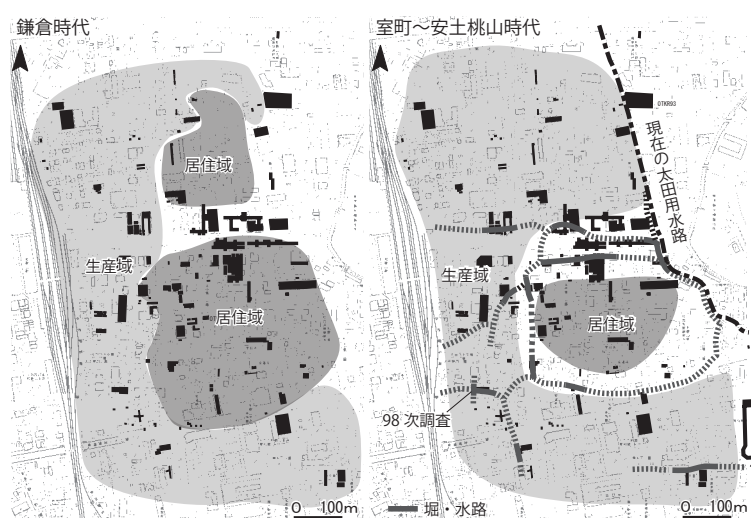


図2 鎌倉時代～安土桃山時代の集落変遷

部分が生産域に変わり、太田城の環濠とされる大溝の内側に居住域が集約され、鎌倉時代と比べて居住域の配置が大きく変化する。こうした状況から少なくとも室町時代以降に後に太田城と呼ばれる前身の集落が形成された可能性が想定できる。

(2) 太田・黒田遺跡における中世後期の様相

環濠 太田・黒田遺跡2・3・5・6・11・17・19・75・97次調査で居住域の周囲を巡る大溝がみつかり、太田城の環濠の可能性が指摘されている。また、それらの大溝の周囲では大溝につながる水路がみつかり（第85・97次など）、環濠の外側にも多数の水路が存在していた状況が把握できる。居住域の周囲を巡る大溝はいずれも微高地縁辺に掘削されており、75次調査で検出された大溝は幅10m、深さ2mの規模を有する大規模なものであった。

太田城の環濠とみられる大溝と周辺の水路が確認された地点と明治時代の地籍図に描かれた土地区画や用水路の位置が概ね一致しており（図3：大木2014）、地籍図の水路の位置から推定すると北側に二重の環濠、西側には排水用の水路をもつような構造に復元できる（図2右）。98次調査において南北方向の溝がみつかり、西側についても北野氏の復原のとおり、二重の環濠をもつ構造であった可能性もある（北野2015）。

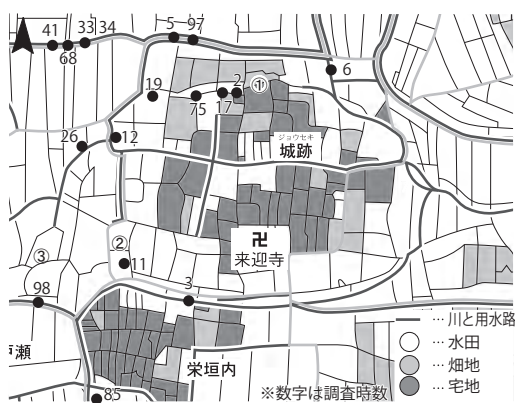


図3 太田城周辺の地籍図

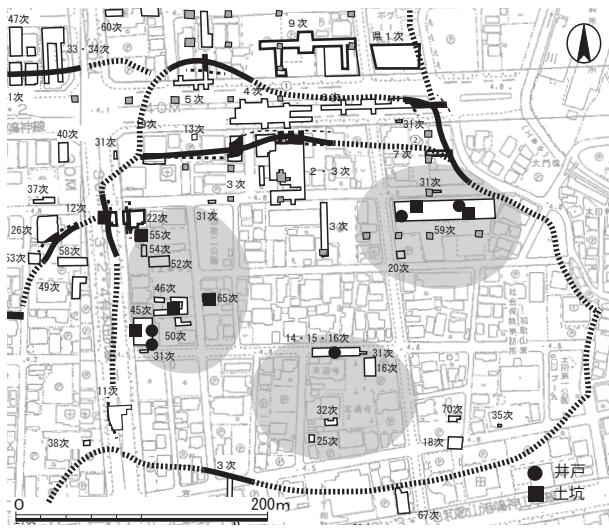


図4 環濠内の遺構分布

たものが図4である。井戸・土坑の分布状況からは環濠内全域に屋敷地が展開する状況は確認できず、空闲地を挟みながら大きく3つのまとまりが存在していたことがわかる。把握できた各屋敷地の広がり、は、直径約120mの範囲である。

出土遺物 北野氏による太田・黒田遺跡第22次調査の大溝出土土器に基づいた研究成果により（北野2008）、出土遺物の様相が太田城の有する都市的な要素の一つとして取り上げられている。しかし、この分析で取り扱われた資料のなかには中世前期の遺物が多数含まれており、必ずしも太田城の時期の様相を示しているとはいえない。また、出土遺物の量については、22次調査の大溝出土遺物でもその多くが中世前期の遺物であり、環濠の調査がおこなわれている19・75次調査でも、環濠内から出土した遺物の大半は中世前期で、中世後期の遺物がそのなかに少量含まれるといった状況であった。水攻め後に太田城内で保有されていた遺物の多くが持ち去られたという可能性はあるものの、調査成果からは遺物量が室町時代以降に急増するといった傾向は見出せず、環濠から出土した遺物からみると、むしろ鎌倉時代より少ない印象を受ける。

遺構・遺物からみる太田城の評価 太田城の評価については、北野氏により東西450m、南北350m、面積12万㎡の大規模な環濠集落で、東西・南北に基幹道路が通り、それを基準に地割が行われ、石組み井戸を備えた屋敷地が軒を連ね、寺院など相当数の瓦葺建物が存在する中世都市的な景観が復元されている（北野2008・2015）。しかし、遺構の分布状況からは環濠内に密集した屋敷地が広がるような状況は見出しにくく、空闲地を介在させながら大きく3単位の居住域が存在している様相が把握できた。また、出土遺物については中世後期に入り、遺物量が極端に増加するような傾向はなく、一般的な集落遺跡と比較して都市として評価できるよ

環濠内の様相 環濠内の様相については、太田城跡の東側で行われた59次調査において、溝で区画された空間に石組みの井戸が掘られている状況が確認されており、屋敷地の存在が把握できる。しかし、多くの調査では各時期の遺構の重複が著しく、調査面積が限られていることもあり、具体的な内容は明らかになっていないのが現状である。こうした状況から環濠内部の屋敷地の広がり、を把握するために、比較的遺構を抽出しやすい井戸・土坑の分布を示し

うな突出した様相を遺構・遺物の内容に見出しにくいのが現状といえる。そのため、太田城に関して現状の調査成果からは、都市というよりは一般的な中世村落としての評価が妥当といえる。

（３）「太田」集落から太田城へ

ここでは、一般的な中世村落である「太田」が城塞化し太田城となる過程について、他の環濠集落や居館などとの比較を通して考えてみたい。

紀の川下流域の環濠集落や居館と太田城の居住域の規模を比較すると、湯橋氏居館と西田井遺跡の環濠集落の規模が太田城における１単位の居住域の規模が概ね一致することが分かる（図５）。また県内の事例では藤並城跡が南北 87 m×東西 75 m、高田土居城が 160 m×220 m となっており、他の事例と比較して太田城として把握されている範囲の大きさが際立っていることがわかる。

発掘調査で確認されている太田城の環濠については、集落を囲郭する目的で形成されたものではなく、環濠の西側部分については閉じていなかった可能性が指摘されている（新谷 2013）。太田城周辺の明治時代の地籍図によると、二重環濠の内側（図３①）や西側環濠（図３②・③）部分には用水路が描かれていないことから、この部分は用水路としては不必要であった可能性が高い。西側部分が閉じていなかったとすれば、環濠集落としての規模が突出して大きいにもかかわらず、環濠内部の遺物量の少なさや、屋敷地間の空閑地の存在、そして全体的な遺構密度の低い状況とも整合性があり理解しやすい。つまり、集落周囲の大溝は用水路として整備されたもので、前身集落が形成された段階では、北側の二重環濠はなく、西側も開口していた。その後、西側環濠が掘削され、北側の二重環濠の内側部分もおそらくこの時期に掘削された。その結果、複数単位の居住域を取り囲む大規模な環濠となった可能性がある。

以上の状況から太田城西側の大溝が掘削される時期を境にして一般集落から太田城へと城塞化していく過程を読み取ることが可能である。まず、室町時代に太田周辺でおこなわれた用水路整備に伴う集落の再編成により太田城の前身集落が形成される（図６（１））。太田城の東側環濠の幅は 20 m あり、北側環濠よりも規模が大きい。また、現在の太田用水路と経路が一致していること、神前遺跡や津秦Ⅱ遺跡などで現在の宮井用水とほぼ同じ位



図５ 居館・環濠集落類型

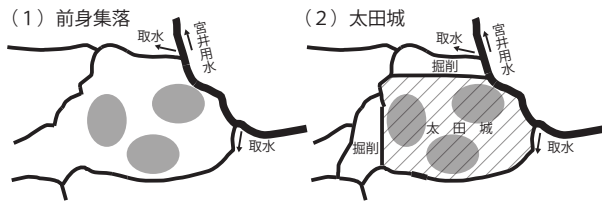


図6 太田城成立のイメージ

比較すると集落構造は大きく変化する。水路で囲まれた範囲には大きく3単位の居住域が空閑地を挟みながら存在しており、この形態は水攻め後に集落が解体されるまで維持される。その後軍事的な緊張が高まるなか、北と西側に大溝が掘削され、環濠集落としての太田城が成立する(図6(2))。つまり、秀吉により水攻めされた太田城とは、集落が大溝により完全に囲郭された段階の集落を指すものとする。

太田城は主に考古学の分野から中世都市的な集落として評価されてきたが、遺構・遺物の検討から集落の内容は太田城の頃も前身集落の時期と大きく変わらなかったことが想定できる。太田城の実態について新谷氏は「戦う城」とは程遠い存在であり、「太田」自体も秀吉方から早くに赦免されていることから、反秀吉の意思をもって太田城に籠もったとは考えにくく、自身の生命や財産を軍勢から守るため、太田城に集まってきたことを指摘する。また、そうした状況から太田は有事の際に集まる場であった可能性についても言及している(新谷2013)。新谷氏が指摘する太田城の実態は、現状の発掘調査成果とも符合しているといえる。

2. 太田城水攻めに関連する遺構

(1) 水攻め堤

和歌山市出水に現存する水攻め堤が2箇所あり(図1①・②)、①地点は和歌山井堰研究会(井堰研究会2004)、②地点は和歌山市関係(和歌山市文化スポーツ振興財団2021)による調査がおこなわれている。また、鳴神V遺跡において水攻め堤に関連する可能性のある盛土遺構が確認されている(図1③)。

①地点の堤の規模は残存長45m、露出している部分の基底部幅31m、堤の最高所は標高7.4mを測り、堤の北・南側に小段をもち、断面形が台形を呈している(図7)。部分的な断面調査ではあるが、シルトや砂質シルトで構成される地層と砂層が互層になっていること、内側が高く外側に向かって傾斜するように盛土がおこなわれていることが確認できる。仮に現況の水田面を堤の基底部とすると堤自体の高さは5.1～5.4m程度になる。地点②の堤は幅約24m、長さ約66mの規模で、高さは調査により約2.2mと判明した(図7)。調査の結果、内側(太

置で中世に遡る用水路が検出されていることなどから、太田城の環濠の一部はもともと紀の川南岸域を灌漑する宮井用水の一部として整備された可能性が高い⁽¹⁾。また、宮井用水から取水する地点に居住域が集約されるなど、鎌倉時代と

田城側）に小段をもつこと、山状に築いた核をもち、①と比較すると不明瞭であるが内側が高く外側に向かって傾斜するように盛土がおこなわれていることが明らかになった。また、堤築造以前は畑地で微高地にあたることから、旧河道部分に近い①地点と比較すると堤基底部の標高は高いため、堤自体の高さは低くなっている。現存する水攻め堤①・②とも内側に小段をもつこと、盛土方法は内側が高く外側に向かって傾斜するように盛土するという共通した特徴を

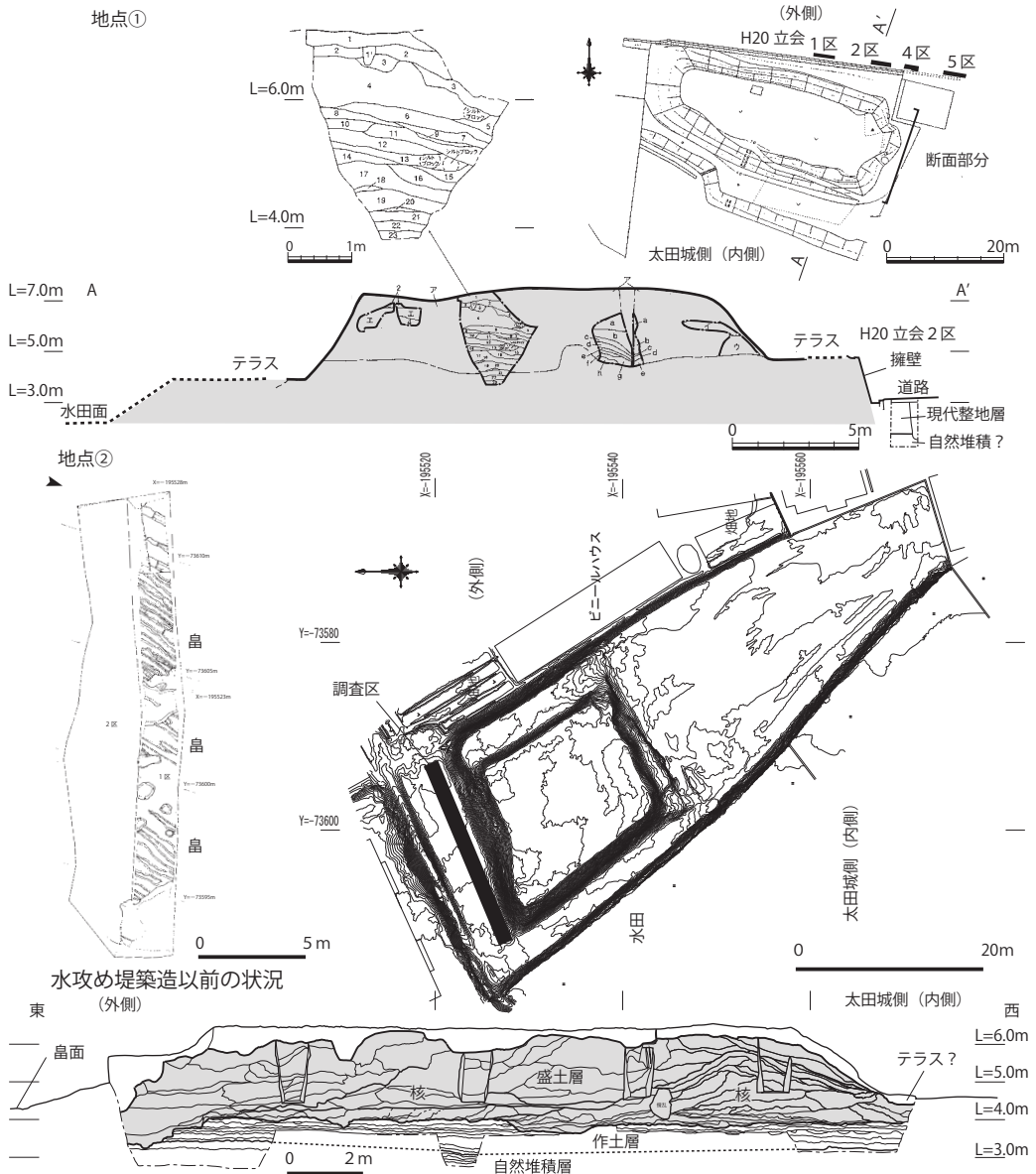


図7 水攻め堤

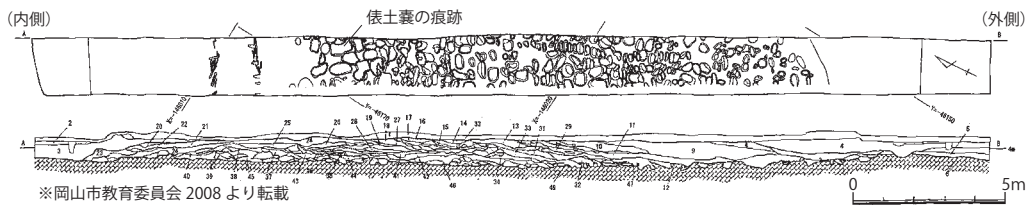


図8 備中高松城水攻め堤

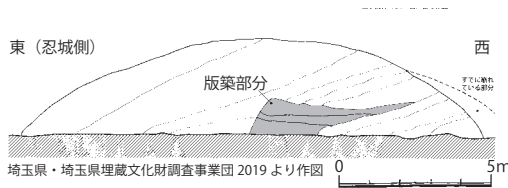


図9 石田堤断面図

もつことが指摘できる。内側の小段については、現在の河川堤防でも川表では堤防の直高が6 m以上の場合に天端から3 mないし5 m下るごとに、小段を設けることが標準的とされることから、破堤対策として小段を設けた可能性がある。

秀吉による他地域の水攻め堤と比較すると、内側が高く外側に向かって傾斜するように盛土する方法は備中高松城の水攻め堤と類似するが、忍城の石田堤では逆に外側が高くなる（図8・9）。また、備中高松城では依土囊を使用したことが発掘調査で判明しており（図8）、太田城でも『紀州御発向之事』によると破堤部分の修築に際し、土囊を使用したことがうかがえるが、①・②・③地点では土囊の痕跡は確認されていないため、破堤部分にのみ使用された可能性がある。そのほか、石田堤では版築の痕跡が指摘されるなど、現状では各地域で構築された水攻め堤の盛土方法や構築技術に明確な共通性を見出すことは難しい。太田城水攻めでは堤の築造が割普請でおこなわれており（弓倉 2008）、担当者ごとに構築方法が異なっていた可能性も想定される。

（2）築堤時の土取り穴

水攻め堤推定地付近で土取り穴とみられる大規模な土坑が複数地点で確認されている（図1④～⑧）。土取り穴の具体的な内容について、友田町遺跡（④地点）の調査成果を中心にみていきたい。

④地点では215 m²を調査し、近世作土の下で大規模な土取り穴を検出した。遺構はさらに調査区外へ広がるため、土取り穴の全体像は不明である。近世作土の高さから土取り穴の深さは0.8～1.5 mと想定できる。土取り穴の埋土は3層に分層でき、下層は土取り時の加工時形成層、中層は土取り後の穴に自然に堆積した地層、上層は土取り穴を人為的に埋めた盛土である（図11）。

下層からは志野焼の細片1点が出土しており中世末の堆積である。中層の自然堆積層は3層に細分でき（自然堆積層1～3）、自然堆積層3は氾濫堆積層で、自然堆積層2と自然堆積層

1の下位からヒシが比較的多く出土したため、洪水後に滞水環境となりヒシが群生していた状況がうかがえる。また、自然堆積層2・3には地震動による変形がみられ、地震が発生した時期の堆積である自然堆積層1の時期が中世末～17世紀後半であることから、慶長9（1604）年12月16日に発生した慶長南海地震との関連が想定される。上層の盛土は厚さ約0.5mで、調査地周辺の中世以前の堆積層のブロック土により構成される。盛土の時期は17世紀中～後半とみられる。



図10 推定される土取り穴の規模

以上の調査内容から、検出した土取り穴は中世末に掘削され、近い時期に発生した洪水の影響で土取り穴内に流入した水が抜けずにヒシが生える池状のくぼみとなった状況が復元できる。土取り穴の初期に堆積した洪水砂（自然堆積層3）は、水攻め終結後に堤を決壊させた際の堆積であり、土取り穴の上層は水攻め堤本体を切り崩した土を用いた可能性が高い。上層に17世紀中～後半の遺物を含むことから、水攻め後江戸時代に入ってもしばらくの間は、堤は残っており、土取り穴も埋められず放置されていたことが分かる。土取り穴の規模については、第7次調査でも同様の土取り穴を埋め立てた地層を検出しており、土取り穴の大きさが幅20m以上、長さ100m以上にわたることが明らかになっている（図10）。2・3次調査では土取り穴はなく、10次調査地周辺に残された土地区画が土取り穴の掘削幅と対応している可能性がある。土地区画から想定される土取り穴の掘削幅は約80mで、平均の深さが1.15mであることから、出水堤（地点①）の規模から推定できる土量とほぼ一致する。そのため⑤～⑧地点以外にも水攻め堤の周囲に土取り穴が存在している可能性がある。今後事例を積み重ねることで堤の規模や総延長などを検討できるものと考えられる。

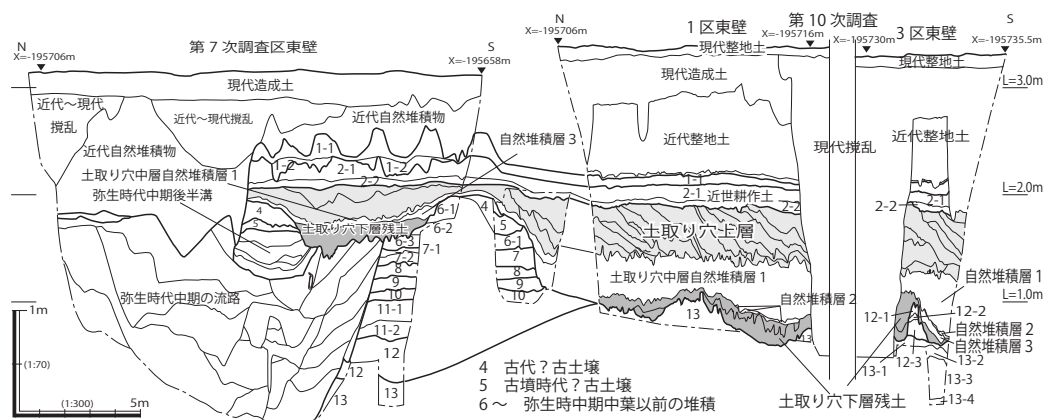


図11 友田町遺跡で確認された土取り穴

3. 太田城の水攻めと宮井用水について

最後に水攻めの導水方法についても簡単に触れておきたい。水攻めの導水方法について、『太田城水責記』では宮・小倉両井の水を仕掛けるとあり、『根来焼討太田責細記』では、26日に紀の川を水を切入れ、27日に両井の水を仕掛けると2段階の導水方法を採用したことが記載されており、水攻めの導水に宮井用水を使用していることが文献史料からうかがえる。土木技術面から検討された宇民正氏によると、水攻めに関連する堤はA～Dの4要素からなり、A・B（横堤）堤が太田城を取り囲んで浸水させる上で中心的な役割を果たした囲い堤、C・D堤が紀の川からの導水と一次的貯留に用いられた導水堤とし、B～D堤によって囲まれた範囲に水を貯留し、その後B堤（横堤）の一部を欠き、一気に太田城域を浸水させたと指摘する（図12：宇民2008）。横堤は太田郷側で日常的な必要から設けられていた施設で、軍事緊張に伴い城の防備として修築されたことが想定されている（海津2008）。絵画史料によると宮井用水の西側に描かれており、宮井用水からの溢流を防ぐために築かれた堤防、あるいは紀の川の氾濫時の洪水対策のための堤防であったとみられるが、これまでの調査では確認されておらず、構造などは不明である。

太田城の周辺には宮井用水から分水する用水路網が巡らされており（図13）、長大な導入堤

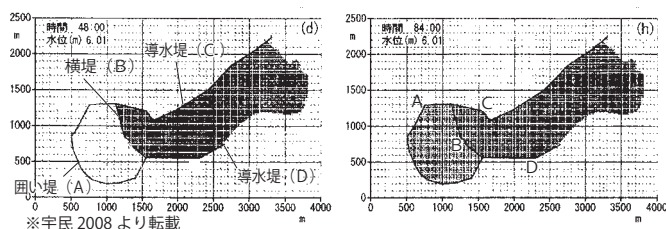


図12 宇民氏による太田城浸水シミュレーション（部分）

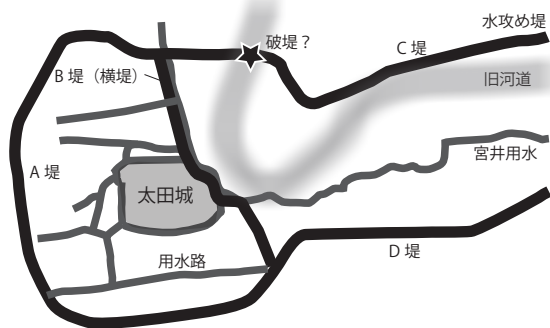


図13 太田城水攻めイメージ図

を築かずとも、城の周囲にA堤を築けば宮井用水を利用し、浸水させることが可能である。しかし、『根来寺焼討太田責細記』など文献史料に横堤が丈夫で水が少しも入らないとあること、出水に残る水攻め堤の存在から、導入堤を築き横堤で一旦貯水している状況がうかがえる。囲い堤を用いて浸水させる場合、効率的に水攻めをおこなえるが、宮井用水から太田城側へ分水するための堰をあける必要があり、堰の開閉をめぐって太田城側との交戦は必須

で、少なからず秀吉側に犠牲が出ることが予想される。そうした要因を避けるとともに、水をも制御することのできる統一権力者としての力を人々に見せつけようとした（弓倉 2008）ことが、読み取れる。また、『根来寺焼討太田責細記』によると太田城側に水が浸水していない段階で舟を使った攻防があることから、当初の計画段階では意図的に横堤で一旦貯水する工程を設けたわけではなく、思いの外横堤が丈夫であったことから、横堤で貯水されていまい、舟を入れて横堤を切り崩す必要が生じた可能性がある。横堤とは明記されていないが、『紀州御発向之事』に「敵の土居を切り崩し、水漸く城内に入り、一揆もちろん浮沈す」という記載があり、ここに書かれた土居が横堤とすれば整合的である。

4. ま と め

太田城と太田城水攻めに関連する可能性のある調査は、数多く行われているものの、まだまだ情報が少なく全体像を把握することが難しいのが現状である。太田城の内部構造や水攻め堤の構造・規模など課題も多く残されている。今後もひとつひとつの発掘成果を蓄積していくことで、太田城や太田城水攻めの具体相に近づけるように取り組む必要がある。

註

- (1) 太田城の東を流れる宮井用水は、旧河道旧大門川を固定し用水路としたとする評価が一般化している。しかし太田・黒田遺跡周辺と旧河道の比高が大きいこと、『豊鑑』では太田城水攻め時に破堤した場所について「いにしへの川のながれの所」と記載されていることなどから、旧河道には宮井用水は流れておらず現在と同様に微高地の縁辺部に掘削されていたと考える。

引用・参考文献

- 宇民 正 2008 「「太田城水攻め」の土木技術面からの検討」『中世終焉』清文堂、大阪：pp. 53-91
- 大木 要 2014 「中世後期の大溝について」『太田・黒田遺跡第 13・19・20 次発掘調査報告書』、和歌山：pp. 32-38
- 大木 要 2019 「太田城成立に関する一試案」『紀伊考古学研究』紀伊考古学研究会、和歌山：pp. 57-64
- 大木 要・菊井佳弥 2016 「太田城水攻めの関連遺構について一友田町遺跡第 10 次発掘調査成果を中心に」『研究紀要』第 30 号 和歌山市立博物館、和歌山：pp. 84-98
- 岡山市教育委員会 2008 『備中高松城水攻め築堤跡』、岡山
- 海津一郎 2008 「文献史料にみる雑賀太田水攻め」『中世終焉』清文堂出版会、大阪：pp. 182-194
- 北野隆亮 2008 「太田城跡の考古学史と景観復元」『和歌山大学紀州経済史文化史研究所紀要』第 29

- 号 和歌山大学紀州経済史文化史研究所、和歌山：pp. 23-41
- 北野隆亮 2015「太田城跡の環濠復元」『太田・黒田遺跡第75次発掘調査報告書』、和歌山：pp. 23-41
- 埼玉県・（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2019『中通南遺跡』、埼玉
- 新谷和之 2013「天正十三年「太田城」の実像―関連史料と空間構造の分析を通じて―」『和歌山城郭研究』第12号 和歌山城郭調査研究会、和歌山：pp. 59-70
- 三尾 功 1985「太田城水攻め」『城下町和歌山百話』和歌山市、和歌山：pp. 28-31
- 森 浩一・白石太一郎 1969「南近畿における前・中期弥生式土器の一樣相―和歌山市太田・黒田遺跡の調査から―」『考古学ジャーナル』第33号 ニュー・サイエンス社、東京：pp. 1-7
- 湯峯 愛 2009「地籍図による太田城水攻め堤防の復元」『和歌山地方史研究』56 和歌山地方史研究会、和歌山：pp. 73-80
- 弓倉弘年 2008「太田城水攻めの歴史学的考察」『中世終焉』清文堂、和歌山：pp. 3-23
- 和歌山井堰研究会 2004「太田城水攻め堤跡の調査―和歌山市出水堤の測量調査―」『紀ノ川流域堤防井堰等遺跡調査報告書Ⅱ（那賀郡編）』井堰調査研究会、和歌山：pp. 63-68
- （公財）和歌山市文化スポーツ振興財団 2021「太田城水攻め堤跡第7次確認調査」『和歌山市内遺跡発掘調査概報―令和元年度―』和歌山市、和歌山：pp. 73-91